

ラフマニノフの「晩禱」



アンドレイ・リュブリョフの「聖三位一体」をあしらった
チェルヌシェンコ指揮による「晩禱」

ロシアピアノニズムを頂上へ上げてから月日がたちましたが、いまだロシアからは離れがたく、お薦めの演奏を尋ねられてもついロシアの演奏家のものへと手が伸びてしまいます。ロシアの演奏の何がここまで私を惹きつけるのか、興味深いところではありますが、今は余り深く考えないようにしています。

先日、縁あってウラディミール・ミーニン指揮のモスクワ国立アカデミー室内合唱団を聴く機会がありました。当日のプログラムはスヴィリドフの小品やロシア民謡が中心でしたが、この合唱団で思い出すのは10年ほど前に同じ合唱団で聴いたラフマニノフの「聖ヨハネ・クリソストムスの典礼」です。無から浮き出してくるような澄んだ声とその静謐な音楽には大いに揺り動かされました。

ラフマニノフの典礼曲には、もう一曲、大作の「Vespers (晩禱)」があります。この合唱曲は、ロシア革命直前の1915年に発表され好評を博しますが、社会主義による宗教の否定によって長い間封印されてきました。1974年に作曲家の生誕100年を記念して発売された、スヴェシニコフとソ連国立アカデミー・ロシア合唱団によるレコードは、驚きと賞賛をもって迎えられたそうです。未だ社会主義の時代にこのような録音が発表できたのは、当時モスクワ音楽院院長であったスヴェシニコフによる尽力も少なからなかったであろうと思います。

私もこの曲を知るまではご多聞にもれず、ラフマニノフと言えば、ピアノ協奏曲と思っていたものですが、「晩禱」と

大きく漢字で書かれた印象深いジャケットのレコードを聴き、たちまちにしてこの曲の虜となってしまいました。この曲は、もちろんロシア正教の典礼音楽であり、ロシア正教はどちらかといえば身近ではなく、ほとんど異教的な響きをすら感じてしまうのですが、そのようなことを感じるよりも先に音楽の美しさが体に通ってくるような印象でした——これが正しい受容かと問われれば、はなはだ心許ないのですが。

ミーニンは、このスヴェシニコフの弟子であり、彼の衣鉢を継ぐべき人であるとみていいでしょう。日本では、まだこのような曲の演奏はなじみが薄く、彼の合唱団が来日してもラフマニノフやボルトニヤンスキーの典礼曲がプログラムに入れられることはほとんどありません。しかし、いずれは演奏会で彼の「晩禱」を聴いてみたいものです。

なお、日本では東京トロイカ合唱団が年に1度、目白の東京カテドラルで「晩禱」の演奏会を行っています。曲の性格からロシアでもそれほど演奏される機会の多くない曲であり、定期的に演奏会で聴けるのは日本だけといっても良いのではないのでしょうか。私も2度ほど聴きに行ったことがありますが、教会の残響とも相俟ってロシアの合唱団に劣らぬ素晴らしい演奏でした。

この曲に興味をお持ちになった方は、足を運ばれてみてはいかがでしょうか。